

# 手放すことについて

## ——成長の後再度考える

津守 真

普通高校の二年生になったGくんが久しぶりに私共の学校に来た。ひとりで行くつもの電車を乗りついできたGくんは、最初庭の入口の門があかなくて、建物をぐるりと回ってかなり見つけにくい玄関のベルを押してあらわれた。私よりも背が高くハンサムな青年になったGくんは、親しげに私に近寄り、正月には郵便局でアルバイトをしてお金をもらったと言う。知っている先生がいるかなと言っ

てホールから庭に出ていった。以前中学生のときに来たときは、庭中にじょうろで水をこぼして歩き、トランポリンをとんだ。これは彼が幼児のときにくり返した遊びである。

### 砂や石を投げる

Gくんは三歳のときに私共の保育室に来た。指を上方にかざして眺めて長い時間を過ごした。その頃手かざし行動ということが自

閉症の特徴的行動のひとつに数えられていた。しかし私は自閉症という診断名を通して子どもを見たくない、この子どもとして接したいと思っていた。

ある日、私はGくんとゆっくりとつき合うことになった。Gくんは地面に数字を書いていた。私も傍にしゃがんで一緒に字を書いていると、彼はときどき私を横目で見た。

急にGくんは砂を指さきでひとつまみとって私の頭の上へのせ、「ほうし」と言った。私が頭を振って砂を落しながら顔を見ると、Gくんはケラケラと笑った。次の瞬間にはまた下を向いて、37、38、39……と、声を出して地面に数字を書いた。そしてまた私の頭や背中に砂をかける。私が後ろを振り向き、ヤッターと大げさに言うとかケラケラと笑った。午前中一杯こんなことをくり返した。私は意外に早くつながりがついたことを

喜んだ。

私はその頃はまだ大学勤めで、週に一日、障害の子ども保育に出ていた。

間もなくGくんが四歳児の新学期になったときである。Gくんは砂場の水たまりの中に砂や小石を投げ入れては水を何度も汲みにいくことをくり返した。ひとしきりそれをやると次には砂や小石を金網ごしに外に向かって投げはじめた。それは金網の間から建物に向かって落ちた。石を投げるのは困ると思うのと同時に、保育をしている私にはこの行動はこの子にとっては意味があるように思えて、それをとめたくなかった。

丁度その頃、私は行動を客観的に見るだけではなく、子どもの内的世界の表現として見ることを考えはじめていた。Gくんが砂や小石を水たまりに、また金網から外に投げるときには真剣な表情だった。よく見ていると、

投げるという語は適当でなく、外方に向かつて手から放すと言った方がより正確ではないかと思つた。子どもは手に持った物を手放すのには自分で練習する期間を必要とするようである。保持することと手放すことと互いに相反する行動を調節すること、を会得しないと、いずれかの極端になってしまう。

手に握つた砂を水の中に手放しているうちに泥んこができる。Gくんはその中に手を入れ、ぐにやぐにやの泥をにぎったり放したりしてかきまわした。私も同じように手を見つけてみると、何かもやもやしたものの出口を見つけて出そうとする感覚が伝わってくる。こんな感覚を共感していると同じことのくり返しの砂遊びも退屈しない。他の子どもたちが砂場から立ち去つてもGくんは砂場にどどまりつづけた。母親はこの子がこんなに砂場で遊んだのはじめてだと言つた。

#### 禁止された領域

一週間後、五月の雨あがりの庭の水たまりの中に、Gくんははだしで入りとても楽しそうだった。そのあと砂場の砂を水たまりの中に放り、また金網の外に向かって投げることをくり返した。帰りの時間になつても帰ろうとしない。母親は、Gくんが二歳くらいの子き水いたずらは禁止して、いと話してくれた。Gくんにとっての水は禁止された領域であつた。水はその境界をこえてはみ出してゆく。この日は彼はその水の中に自分の身体全体を入れた。そして「もっと水」と言って要求した。母親はこの頃この子は水に憑かれていた。父親は、水に執着しすぎるのではないかと心配した。

## 身体感覚による想像

二学期になるとほとんど一日中トランポリンをする日もあった。Gくんの手をとって、

1、2の3と3で高くとび上がり、おりてころがったところを背中をくすぐるとケラケラと笑う。上方に向かって跳躍する開放感を感じるのである。手をとって高くとんでいるとき目を閉じている。自分自身を身体運動感覚で純粹にたしかめているように思えた。

Gくんは砂場で砂山を何度も作ってはこわして遊んだ。たまたま訪問されたオランダのユトレヒト大学のエディット・フェルメール先生が、子どもが砂山をこわしたとき傍にいた保育者はそのままだしていたが、そのとき保育者はどう思っていたか、砂遊びをもう一歩先へ発展させようと思っていたかどうかとたずねられた。一緒に砂遊びをしていたOさんは「そのことをもっと面白く楽しむのにと

うするかを考えていたが、もう一歩遊びを発展させようという風には考えない」と答えた。フェルメール先生はうなずいて、触運動感覚がイマジネーションの根源なのであって、世界はここからエントファールン（たみこんだ包みがひろげられること、すなわち発達）することであることを語られた。

私は手放すことについても、その身体運動感覚が精神の発達に重要な位置を占めていることを確認することができた。

### 排泄——保持したものを手放すこと

夏が近づいたころ、Gくんは私共のところに来たがらない日がつづいた。数週間たったとき父親と母親がそろって話しに来た。来たがらないこと自体は心配していないが、便秘がひどいので、そのことで相談にきたと言う。もう十日以上も大便が出ない。日によっ

ては一日中部屋の隅にうずくまって力んでい  
ることもある。そうなると母親も一日中子ど  
もを見つめている。どうしたらいいだろうと  
の相談である。私はGくんの一学期の様子を  
話し、砂遊びをしているときに、「でたの、  
うんうんした」と言うのに気付いたことなど  
話した。実際に大便が出ているのではなく  
て、砂を水たまりにいて遊んでいたときの  
会話である。それまで私は手放すことと排泄  
とを結びつけて考えていなかった。

その日私は付属病院の小児科医を紹介し  
た。一週間くらい便秘しても心配はいらない  
こと、洗腸などするよりもとよきき漢方薬  
を教えてもらったと両親は報告にきた。私は  
両親の落ち着いた対応に印象づけられた。

秋になって、Gくんはじょうろの水を  
ちよっぴりずつ庭のあちこちにこぼすこと  
をやりはじめた。つまり少しづつ水を手放して

みるのである。水をこぼしながら「火曜日は  
うんこ」と何度も言っていることもあった。

ある日Gくんがいつものように庭に水をこぼ  
して歩いているとき、私は「おしっこジャ  
ー、うんこポタポタ」と言ってみた。それは  
Gくんに変な顔が入って、「ほくおしっこジ  
ャー、チャ(弟のこと)おしっこジャー、マ  
マ、パパ、じゅんちゃん、〇〇ちゃんおしっ  
こジャー」と言って水をこぼして歩いた。地  
面に数字をかきながらも「おしっこジャー、  
うんこポタポタ」と言っていることもある。  
そのうちに「水くんできて」と言う。もっと  
水というので私は何度も水を汲みにいったが  
あんまり水びたしになるので、つい少しずつ  
にしてしまう。そんなとき、私自身もどうし  
てもっと大胆に水を手放さなかったのかと後  
になって反省してしまう。そんなとき、Gく  
んはシャベルを振り回して私の頭から砂をか

けた。

三学期になって最初の日、Gくんはプラスチックの積木を両手にもって蛇腹のトンネルの中に入り、それを外に向かって投げることをくり返した。自分もその中にもぐりこみ、身をくねらせて出てきたときには大声で笑った。私はこのことを直腸の中から自分自身が大便になって出てきたかのように思った。

この日のことについて、私は『保育の体験と思索』（大日本図書、昭55、P・184―187）に詳しく記した。何人かの方々から、これは考えすぎではないかとの批判を受けた。そこではここに述べた経過を記さなかったことにもよるのではないかと思う。

これで便秘が劇的に治ったわけではない。この後もときどき、便秘が一週間くらいつづいて落ち着かないと母親から話をきいたこともある。また手放す遊びもつづいた。母親は

「家でもいっぱいちらかして、でも私はいいと思っさせておくんです。いままでだと便秘していると気になって、じつとみつけていたんですけど、この頃は先生たちに話せばもう安心して、買物なんかに行くんです」と言う。保持することと手放すことが子どもの世界のテーマになっているときも、生活全体の変化の中でそれが意味をもつことが分かる。

\*

Gくんは就学を一年遅らせ、普通の幼稚園にいつから普通学級に進んだ。いま高校二年生である。成長した後には、幼児期に本人も周囲も格闘した精神的課題は多面的な生活の中にかくされて、外部からは観察されない。しかしそれは身体運動感覚として意識と無意識の中間層に記憶されているのだろうか

考える。発達危機の際して、それが異なっ  
た次元で再びあらわれるとき、幼児期に会得  
した体験は、自分自身でそれを解決するの

役立つだろうと思う。

(愛育養護学校)

